

## 本との別れ

教授 池上 哲 司  
(人間関係学・倫理学)

この三月定年を迎えるにあたって、研究室とアパートの本の処分に悩まされている。大谷大学を退職して東京の自宅に帰るものの、これらの本をそのまま自宅に送ったら、大量の本に家が占拠されて自分の居場所がなくなってしまう。もともと自分の好きで購入した本なのだから、誰の責任でもなく、ひたすら自分が悪いのだけれど、まさかこのような事態に至るとは思ってもいなかった。とはいえ、時は刻々と過ぎて定年まであと半年となり、定年後の自分の居場所を確保するために、本の処分を泣く泣く決意した。

もっとも本とはいっても、高価な貴重本や初版本でも、特定の領域についての完備した蔵書でもなく、いわゆる雑本ばかりである。中学時代から購読していた『将棋世界』や『鉄道模型趣味』、『ガロ』といった雑誌、大学時代に読んだ角川文庫、新潮文庫、岩波文庫、さらには歴史や科学についての啓蒙書、解説書など。そうそう、それから哲学・思想関係の書物。最後の類は今後の研究のためにも、できるだけ手許に置いておくとして、残りはそれこそ簡単になんの未練もなく処分できるはずだと考えていた。ところが、どっこいそうは問屋が卸さなかった。予想に反して、どうしてもよいような本が捨てがたく、哲学・思想関係の書物のほうが簡単に処分でき



てしまう。

これは一体どうしたことだろう。どうやら、自分にとっての本の価値とは、本に書かれている内容の価値とは別のようだ。いやもう少し正確に言おう、自分にとっての本の価値は、本の内容の価値に尽くされるものではないのである。もちろん本の内容が優れていることは、その本の価値を左右する。しかし、本を読むということは単に本に書かれていることを理解するということとは違うのではないか。本を読み、それを理解し、その理解を通して自分が変わる、それが読書という行為の核心である。

読書とは本を読むことを通しての冒険である。というのは、未知の世界、未知の文化、未知の発想に出合い格闘することで、自分の世界、自分の発想、つまり自分自身が大きく変わらざるをえないからである。これまでの自分の世界や発想が根底から揺り動かされる

ことがあるかもしれない。しかし、その苦しい冒険の先にうっすらと見えてくるはずの新たな自分なるものへ向かって、はらはらどきどきしながら頁をめくる、この緊張感はこたえられない。初めてのデートで、彼女と落ち葉を踏みしめながら黙って歩いていくときの緊張感には及ばないかもしれないが、読書で味わえる醍醐味もなかなかのものである。

白土三平の『忍者武芸帳』は、貸し本屋からの、多くの人の手によってぼろぼろとなった『影丸伝』という形で小学生のときに初めて出会った。大人たちの目を盗んで読んだのは、忍者同士の戦いの中で凄惨な場面や女性の裸体が描かれていたからだった。そこには、大人たちが子供には見せないようにしていたものが、はっきりと示されていた。あのとき、子供の世界とは違った大人の世界をぼんやりとながら知ったのだと思う。

中学時代に教科書で知った中谷宇吉郎の文章は、ふつうの言葉を用いて誰にでも分かる明晰な論理が展開されていた。その文章の風通しのよさは、読む者のこちらの頭の中をもすっきりさせてくれるようだった。彼の文章をもっと読みたいと、夏休みに神田の古本屋

街を絶版品切れの『中谷宇吉郎随筆選集』を求めて歩きもした。将来、中谷のように物理学の研究をしながら、平易で明快な文章が書けたらいいなという思いが、大学受験の際に理科系を選ばせることになった。

これらの本はどうしても手放すことができない。それに反して、ドイツ語版『ハイデガー全集』はなんの未練もなくひとに貰ってもらうことにした。ハイデガーの思索の深さと大いさとは心底驚かさされ、尊敬せざるをえないけれども、彼の哲学がこちらの心を振るわせ揺り動かすかとなると、躊躇せざるをえない。結局は、こちらの哲学的才能の不足によるハイデガーに対する無理解ということになるとしても、肌が合わないものはなんともしようがない。

こうして、自分にじっくりくる本やこれまでの人生と分かちがたく結びついている本を取り分けていくと、そこには自ずから小学生から現在に至るまでの自分の人生の歩みが描き出されていくようである。ここ当分は、本を捨てることで自分の一生を思いつつ、いつかやってくる死という、本との最終的な別れに備えていくことになるだろう。